日本色彩学会関西支部講演会報告

第9回 色彩基礎セミナー『色覚とカラーデザイン』

日本色彩学会関西支部主催の「色彩基礎セミナー」は、例年好評の内に平成16年度で第9回を数え、欠かせない支部定例行事となっている。当年度の色彩基礎セミナーは、平成17年3月4日(金)大阪市立大学文化交流センターで、「色覚とカラーデザイン」をテーマに開催した。

第一線でご活躍中の講師陣を迎え、東は神奈川県から西は福岡県まで計47名の参加者があり、非常に盛況・好評の内に終了することができた。

1) テーマ設定の趣旨

色覚に何らかの先天性の障害をもつ人は、日本人ではおよそ20人に1人の割合(男性約5%、女性約0.2%)と言われており、また、高齢化社会の進行で色覚面での不便を余儀なくされている高齢者の増加も無視できない。色覚の問題は極めて身近な問題であるにも関わらず、社会の中では潜在化してしまいがちな側面があるため、カラーデザイン面でこれらの人たちへの配慮が無意識的に不足している場合がある。色覚のメカニズムと色覚に纏わる問題点の実態を理解し、どのように対処すればよいかを学ぶことは、今後のカラーデザイナーにとっては重要な基礎知識となると考えられ、このテーマを設定した次第である。

2) 講演要旨

第1セッション

『色覚の仕組みと色覚障害』

(九州大学大学院 芸術工学研究院 須長正治氏)

ヒトが色を認識する仕組みとして、網膜上に結像された外界からの光が視細胞(L、M、S錐体)を刺激し、電気信号に変換された刺激が脳に伝えられ、それぞれの刺激量の比によって色が認識されるメカニズムが判り易く解説された。

先天性の色覚障害は錐体に原因があり、錐体の種類や障害の度合いにより見分けることができない色の組み合わせと程度が異なり、色覚障害のタイプが分類される。色覚障害者の色の見え方は原理的に立証でき

ないが、色弁別能は測定可能で、これを用いて色覚シミュレーションも可能である。

実際のカラーデザインを行うに当っては、混同色線を理解し、色覚シミュレーションを活用し、色彩に加えて他の情報伝達手段を併用することが有効であるとの提言があった。また、CIE1931_{xy}色度図上の混同色線を、デザイナーに馴染みのあるマンセル等の表色系へ変換するソフトも紹介された。

第2セッション

『高齢者の居住環境と色彩』

(摂南大学 建築学科 田中直人氏)

環境デザインにおいて、色とどのように付き合っていくかは、人間生活と密接な関わりがあり、非常に根の深い問題である。環境デザインは、老若男女、各種障害者や外国人等々の区別無く、全ての人への「幅広い対応」が望ましく、所謂ユニバーサルデザインが求められているが、その一部として、高齢者にも優しい色彩環境が重要な要素として位置付けられる。

わかりやすいデザインを志向することは当然として、それに留まることなく環境全体としてもっと美しく心を癒す調和のとれたものにしていくことが必要である。

サイン環境や色彩デザインとしての原則は、①わかりやすさ、②幅広い対応、③安全性、④親しみやすさ、⑤美しいこと、であることが、デザイン先進諸国での環境色彩デザインの数多くの実例写真の紹介を交えながら、講師の個性溢れる語り口により説明された。

高齢者に優しい色彩環境デザインをという演題趣旨をベースに、ユニバーサルデザインとはどうあるべきかを強く訴えかけるものであった。

第3セッション

『カラーデザインへの色覚配慮の実際』

(株式会社文化総合研究所 橋本知子氏)

カラーデザインの場において、「伝えたい情報」あるいは「伝えなければならない情報」に対して『色や色名だけでは伝わらない場合』がある。複雑に入り組んだ